南極地域観測統合推進本部　第27回外部評価委員会議事の記録

１．日 時：令和５年４月 28 日（金）10:00～11:20

２．場 所：オンライン開催（※文部科学省 研究開発局１会議室）

３．出席者：

（委員）

五十嵐　道　子　　フリージャーナリスト

兼　原　敦　子　　上智大学法学部　教授

白　山　義　久　　国立大学法人京都大学 名誉教授

田　中　康　夫　　元日本郵船株式会社 専務経営委員

中　田　　薫　　国立研究開発法人水産研究・教育機構 理事

中　村　　尚　　国立大学法人東京大学先端科学技術研究センター 教授

松　本　高　志　　国立大学法人北海道大学大学院公共政策学連携研究部 教授

山　崎　俊　嗣　　国立大学法人東京大学大気海洋研究所 教授

渡　部　重　人　　北海道情報大学経営情報学部 教授

（事務局）

山　口　　茂　　文部科学省研究開発局海洋地球課 極域科学企画官

細　野　亮　平　　文部科学省研究開発局海洋地球課 課長補佐

４．議 事：

（１） 事務局より、当日の議題・配布資料について確認があった。

（２） 以下の議題について審議がなされ、資料４の評価担当で本部総会に諮ることが了承された。

《議題》

1. 外部評価委員会の議事運営について
2. 南極地域観測事業の概要について
3. 南極地域観測第 IX 期６か年計画の評価方法について
4. その他

主な意見は以下の通り。

（議題 3. 南極地域観測第 IX 期６か年計画の評価方法について）

【五十嵐委員】

当初計画や中間評価に基づいて評価することになりますが、この何年間かコロナで計画見直しが必要になった部分があって、当初とは違う結果となった部分があった場合、その評価についてはどういった考え方をしたらよいのかお伺いしたいです。

例えば、計画を具体的な数において下回ってしまったというふうに評価するのか、もしくはそういった条件にもかかわらず大変よくできたという見方をするのか、教えていただければと存じます。

【細野海洋地球課課長補佐】

自己点検において、コロナの影響により研究観測等の進捗にマイナスの影響があった場合には、具体的にどのような影響があったのか、また、それに対して取り得る代替手段を講じたかなどの確認をしていただき、やむを得ないと判断される場合には、それを加味した評価をお願いできればと考えております。

そのためにも、実施機関には、状況が分かる記載ですとか分析等を自己点検にしっかり記載いただくことが必要かと思いますので、その点はしっかりと伝えていきたいと考えております。

【五十嵐委員】

そのようにしていただければと思います。よろしくお願いいたします。

【兼原委員】

２点お尋ねさせていただきたいと思います。

１点目、中間評価での指摘事項に対して、どういう取組がなされたかという点は、もう少し明確に今回の評価項目の中に入れていただいた方が良いと思います。

中間評価を行ったことが、どういうふうに中間評価以後の観測事業に影響を与え、良い効果を持ったかということは、当然、評価するべきことだと思います。ですので、中間評価を踏まえて、どのような改善なり進展なりがあったか、それ自体が一つの評価の項目であるということを明確にしていただければ、より良いのではないかと思います。

２点目、資料３－１の「３．評価の観点」、(1) と (2) につき、評価のポイントがそれぞれに対応して、3つ示されています。そのうちの最初の必要性（重要性、緊急性)、これは分

かりやすい評価視点だと思います。しかし、有効性という中には、有用、つまり「役に立つ」という意味も恐らくここに入ってくるんだろうと思うんですね。それから、そうやって有効性の内容を柔軟に考えれば、当然に「効率性」の内容と重なってくる、あるいは、極めて密接にリンクしてくるということはあるのだろうと思います。

ですので、今次、評価をさせていただくに当たって、有効性と効率性の評価というものは重なり得るし、あるいは、密接に関連し得るのであって、その点で、この視点というのは柔軟に考えさせていただきたいと思うのですけれども、この点についてお答えをいただければありがたく思います。

【細野海洋地球課課長補佐】

先生からいただいた御指摘というのは、非常に重要な点だと思っております。

まず1点目ですけれども、中間評価において指摘された留意点・課題に対する対応状況、改善点については、どのような対応を取ったか確認をしていく必要があると思いますので、改めまして、事務局で留意点と考えられる部分をピックアップし、それに対してどのように対応したかというのを一対一で分かるように、実施機関に資料作成を依頼し、委員の先生に評価を行っていただけるよう進めたいと思っております。

2点目の有効性と効率性を柔軟にという点でございますけれども、今回こちらに挙げている一つ一つの観点というのは例示でございますので、先生おっしゃるとおり、これも踏まえつつ、ここにない観点も含めて、柔軟に評価いただければと思っております。確かに、先生おっしゃるように、若干重なる部分も出てくると思いますので、その点については、その評価の中で先生のほうでうまく記載いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

【兼原委員】

非常に分かりやすい十分な御説明をいただきまして、誠にありがとうございました。

【松本委員】

資料３－２（別紙）について、今回コロナがある中、こうした事業を大変な苦労の下、進められたと思うんですが、先ほどもありましたとおり、当初の目的がありまして、そこにコロナが来て、コロナの対応をして当初目的を達成したという場合もありますし、下回ったんだけれど、頑張ってそこまで達成したという場合もあるかと思います。

また、設営においても、計画的な燃料使用や環境保全等、コロナがあるところで、当初の

こういう目的を達成した、もしくは、頑張ったけれど下回ったというようなことがあると思うんですが、一般的に、コロナに対する対応として、当初目的になかった、計画になかったものも出てきたのではないかなと想像します。それは、恐らく、ここにある安全で効率的な維持とか隊員の負担軽減なんかにそういう一般的なものが含まれるんだろうと思うんですが、その中でも、やっぱり当初にはなかった対応が新たに出てきたんだろうと思います。そういったものについて、どのように評価していくのかというのをちょっと確認したいと思います。当初になかったものがあるということについてです。お願いします。

【細野海洋地球課課長補佐】

計画として見れば、計画どおりできたというものについても、計画どおり行うために当初予定していなかった取組を行うなど多大な努力を払ったというケースもあるかと思います。そういったものに関しては、単に計画どおり実施したのでBということではなくて、その点も加味していただいて、ポジティブに評価をいただければと思っております。

【松本委員】

あくまで当初計画につながる形で、追加的なものも評価していくということでよろしいでしょうか。

【細野海洋地球課課長補佐】

そのとおりでございます。

【松本委員】

先ほどもありましたとおり、そういったところが明示された自己点検が出てくると理解しています。

【細野海洋地球課課長補佐】

その点につきましては、実施機関に対しても、しっかりやったことについては、評価委員の先生が評価しやすいように、明示的に書いてもらえるように、事務局からも伝えたいと思います。

【白山主査】

私の立場から言えば、計画どおりにできたというとBがつくわけですが、コロナの非常に大きな障壁があったにもかかわらず計画どおりにできたときには、どちらかと言えばもっと上の評価をしてもいいのではないかと考えておりまして、そういう意味から言うと、コロナに対してどう対応したかということをしっかり書いてもらった上で、計画どおりにできた場合であってもBではなくてAやSがついてもいいのではないかと考えておりますので、先

生方には、そういう目から評価をしていただけるとありがたいと思います。

【中田主査代理】

今日の御説明の中で、例えば、2020年は隊員数を半分ぐらいに減らした。ということは、そのときに計画もそれなりに見直されて対応されたのではないかと思うんですね。今回、中間評価の結果にのっとった形でやっていくにしても、6年間の評価をするということになると思うんですけれども、その計画の見直しみたいなものがあったのかどうかがまず聞きたいことと、計画を見直した場合に、その見直した計画について100％できたのかどうか、あるいは、これは力点を入れて当初どおりやりましょう、それに対しては、一所懸命やったけれどもできなかった、そういうちょっと質の違いのようなものがあると思うんですね。ですので、その辺が分かるような形の説明というのが自己評価の中にきっちりと分かるようにしていただければなという希望です。

そういう意味から言うと、計画どおりいったものに関しても、一律には評価はなかなかできないと思うので、その辺をはっきり書いていただければと思いました。

【細野海洋地球課課長補佐】

コロナの影響を受けて基本計画を変更したかですが、結論としては、第9期の6か年計画の変更はしておりません。これは、コロナがいつまで続くのか見通しが立たないですとか、何をどこまで変更するかという議論が難しかった等聞いておりまして、まずは計画に対して可能な限り実施する方向で進めたということでございます。

2点目の通常のできた、できないについては、コロナの影響があったのか、なかったかも含めて自己点検に結果としてしっかり明記いただくという点についてはそのとおりだと思います。実施機関に対して、その点が分かるような形で、評価する際にその辺を加味できる記載になるように作成いただくように事務局から伝えたいと思います。

【中田主査代理】

計画変更は特にしなかったということを承りました。

【中村委員】

資料3－1の「3．評価の観点」において、(1) 観測計画等とございます。そこの2番目の項目に、有効性とあります。3つ項目があるんですが、一番上は、研究観測によって得られた成果等が国内外の研究にどの程度影響を与えるか、これはかなり明確なんですが、次のとこ

ろが、その同じ成果が国内外においてどの程度貢献できたかと。これは具体的にどういった側面を評価すればよろしいのでしょうか。どの程度貢献というのは、私にとっては漠然とした記述だなと思っておりまして、その辺り、御説明いただければ幸いです。

【細野海洋地球課課長補佐】

こちらの項目に関しましては、例えば、IPCCの気候変動に関する政府間パネルですとか、WMOの世界気象機関といった国際機関などに対して、政策的観点ですとか行政的観点で、その議論に資する、どの程度貢献しているかといったことを想定しているところでございます。

どの程度という部分につきましては、自己点検で実施機関にSABCと、その根拠も明記いただきますので、そこを御確認いただいて、その自己点検結果が妥当かどうかというところを御判断いただければと考えております。

【中村委員】

多分、どういうところの貢献というところをもう少し具体的に書いていただけると、こちらとしても理解がしやすいかなと、あるいは、自己点検する側も、その辺り、きちんと書けるのかなと思いました。ありがとうございました。

（議題 4. その他）

【兼原委員】

今後の会議開催にあたり、少なくともハイブリッド、言い換えればオンライン出席を可能にしていただけると、ありがたいと思います。

もう一つは、日程照会の〆切までご回答をお待ちすることは当然だと思いますが、〆切を過ぎましたら、できる限り迅速に日程を御決定いただきたいと思います。

【細野海洋地球課課長補佐】

会議の開催につきましては、基本的にオンラインでの開催を予定しております。

また、日程照会につきましても、迅速に決定し、御連絡させていただきたいと思います。

（３）事務局から、次回8月頃に関係省庁及び国立極地研究所のヒアリングを予定しており、委員の予定を確認の上、開催日程を連絡する旨の説明があった。

―― 了 ――